



きれいさと美しさの本質的相違

岡本太郎 (1911-1996) は、『原色の呪文』(文藝春秋、1968) で、「きれいさ」と「美しさ」とは本質的に違っており、場合によっては「あきらかに反対に意味づけられることさえある」(op. cit., 83) と言及している。

「美しさ」は、「気持のよくない、きたないものにでも使える言葉」(ibid.) で、「みにくいものの美しさ」というものがあり、「グロテスクなもの、恐ろしいもの、不快なもの、いやったらしいものに、ぞっとする美しさ」があると指摘する。美しさには「きれい、きたない」という分類にはならない、もっと深い意味をふくんでいる」(ibid.) と指摘する。

それに対して、「きれいさ」は「本質ではなく、なにかに付随してあるもの、型だけであるもの」(ibid.) と言及する。

さらに、「ゴッホは美しい」が、「きれいではありません」、ピカソも美しいが、「きれいではない」(ibid.) と述べる。

岡本にとって芸術の本当の凄みは、うまい・きれい・心地よいという絵画の絶対条件がない作品であっても、「見るものを激しく惹きつけ圧倒させる」(p. 85) ところにあると考える。美しさには、それぞれの哲学や精神が反映されている。 (吉村耕治)

● 大辞泉ひろいよみ 1-あ

大辞泉は、1995年初版の2,912頁の小学館発行の国語大辞典である。大辞泉の巻末の「カラーチャート色名358」の企画から印刷現場立会いまでを担当した関係がある。

色名に関係した言葉を、気ままに取り上げてみようと思う。色彩教育の一端のお役に立てば幸いである。

藍：夕デ科の一年草。葉・茎から藍染の染料をとる。インジゴ。藍色の語源。

藍色：藍で染めた色。濃い青色。

藍絵：藍色の濃淡で刷った浮世絵版画。

藍型：藍の濃淡で染め出した型染め。

藍甕：染料の藍汁を溜めおくかめ。藍壺。

藍建て：水に解けない藍玉をアルカリで還元して染色できる状態にすること。

藍玉：愛の葉を発酵させ、固めたもの。

藍花：ツユクサの別名。

藍海松茶：染め色の名。

青：色の名。三原色の一つ。晴れた空のような色。藍系統から黄みを加えた緑系統までの総称。襲の色目では緑色を意味する。馬の毛色で青みがかった黒。未熟、若いなどの意。

青青・蒼蒼・碧碧：あおあお。

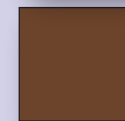
青嵐：初夏の青葉を揺すって吹き渡るやや強い風。 (永田泰弘)

● 色名に採用したい季語一 7

● 紫苑色 (しおんいろ)・晩秋
キク科の多年草の薄紫色の花の色。(C40 M40)



● 椎茸色 (しいたけいろ)・晩秋
食用のしいたけの傘の茶色。(C60 M80 Y100 K20)



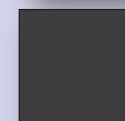
● 枯野色 (かれのいろ)・中冬
草が枯れ果てた野原の色。(M30 Y50 K30)



● 蠟梅色 (ろうばいいろ)・中冬
唐梅ともいい艶のある黄色の花びらの色。(M20 Y70)



● 海苔色 (のりいろ)・厳冬
生海苔、乾海苔など黒色。(K90)



季語に、単純に「色」をつけて、この表現が慣用色名になっていくかどうかは、疑問である。しかし、色の表現を豊かにすることを夢見ている私にとって、嬉しいことである。毎年の流行語に「色」をつけたり、漫画や小説の中の新しい色名表現が慣用されるのも楽しみである。それらが、国語辞典に掲載されて根付いていくことを楽しみに、若い人たちに見守っていただきたいと思う。 (永田泰弘)